成蹊学園

SEIKEI

SEIKEI GAKUEN 広報 vol.69 2008 Spring

Contents

2 新年度のごあいさつ（専務理事／学長・校長）
6 成蹊学園環境活動の取り組み
7 桃李の人々（黒川 清）
10 成蹊教育のいま（西崎 文子／木下 ひさし）
12 大学の近況
14 中学・高等学校の近況
15 小学校の近況
18 2008年度事業計画・予算の概要
19 2008年度入学試験結果
20 学園史料を読む

「国際性」が成蹊学園の強み。
世界に通用するプロを
育ててほしい。

インタビュー 桃李の人々

黒川 清

新年度のごあいさつ
成蹊学園の新たな歩み

ISO14001認承取得に向けて

Series 学園史料を読む。

蹊。

萌え出づる頃 ―成蹊小学校の遠足―

小学校の春の行事と言えば遠足。

ここに掲げた写真は、大正十二年五月、成蹊小学校の児童が遠足で高輪の岩崎男爵邸を訪れた時のものです。好天に恵まれたのでしょうか。白いブラウスにスカートの軽装。帽子をかぶっている児童もいます。写真奥の建物は岩崎弥之助がイギリス人建築家ジョサイア・コンドルに設計を依頼して明治四十一年に完成した別邸、開東閣です。東京湾が眺望できたというこの邸宅で子どもたちはどんな一日を過ごしたのでしょうか。

残念ながら、この日の記録は残っていませんが、大正十年五月の岩崎邸への遠足の様子を同校の訓導渋谷光長がその著書『萌え出づる頃』（資料1）に記しています。「温室から順々に案内せられて藤棚の下に来ると、覚えず『先生綺麗ですね』と感嘆の声が」あがりました。山を登りつくすと遠くに船の数々、近くに黒船の名残を止めたお台場が見え、「子供は唯もう我を忘れて茫然と見とれている。一行はやがて芝生の上に解散した。滑つても転んでも大丈夫、もう子供ははぢきれる様な喜び」、飛んだり跳ねたり、帽子を奪い合ったり。先生の指導のもと皆で合同体操や遊戯を楽しみ、岩崎家からお菓子をいただいたとあり、子どもたちの姿が見えるようです。

こんな風に書くと、今とさして変わらない遠足を想像されるかもしれませんが、当時池袋にあった成蹊小学校の遠足は私たちのイメージするそれとは少し違っていました。

遠足は身体を鍛錬する、児童同士が親しくなる、教師が児童の個性を観察するなど、「狭い教室ではとても望めぬ」機会を与えてくれる「広い意味の教育」として重視されており、「毎日の午後」に行われていました。子どもたちは先生に引率されて学校裏の狐塚や落合の不動園、雑司が谷の鬼子母神などへ徒歩で出かけ、バッタを追い、レンゲ草を摘んだり、鬼ごっこをしたりして遊びました。『萌え出づる頃』の記述を借りれば、成蹊小学校では「遠足を物見遊山とは見て居な」かったのです。

（成蹊学園史料館　桜井佳乃）

（資料1）渋谷光長『萌え出づる頃』（成蹊学園出版部、大正11年）

100th ANNIVERSARY 1912-2012

成蹊学園広報

2008年4月1日 発行
学校法人 成蹊学園総務部広報課
東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1 電話（0422）37-3517
URL http://www.seikei.ac.jp　e-mail koho@jim.seikei.ac.jp

FSC ミックス品
FSC認証林及び管理された森林からの製品グループです
www.fsc.org Cert no. SGS-COC-2637
© 1996 Forest Stewardship Council

成蹊学園の新たな創造に向けて

専務理事あいさつ

期待に応える教育環境の実現とさらなる教育の充実をめざして

成蹊学園 専務理事
成蹊学園 将来構想検討委員会委員長
橋本 竹夫 Takeo Hashimoto

この武蔵野の成蹊学園のキャンパスは、皆さんが心新たに新学期を迎える今、満開の桜と欅並木から萌え出る新緑で一番美しい季節となります。新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。皆さんは、新たに一歩を踏み出す学園に対して、大きな期待をされているものと思います。また、既に在学をされている皆さんも、新入生の皆さんと同様に新学期を迎えて心ときめくものを感じていることでしょう。各学校の教職員の協力を得ながら、皆さんの期待に応え満足していただけるように、教育環境を整えることが私の責務であると考えています。

小学校はこの春、トンネル山の仮校舎で新学期を迎えますが、今年七月には現在建設中の新校舎が竣工する予定であり、九月から始まる二学期からは新しい校舎で勉強をすることになります。すでに、一年生から三年生までは一学級二十八人一学年四学級編成、四年生は一学級二十八人一学年四学級編成に十六人一学級の国際学級が加わり、五年生と六年生は国際学級の児童が混入した一学級三十二人編成の四学級編成の授業が受けられる体制にありますが、この少人数教育の実をあげるのに適した新しい校舎で学ぶことになります。

小学生の皆さん、楽しみにしていてください。

現在、高等学校の生徒の皆さんは昨年七月に竣工した中学校のホームルーム棟で教育を受けていますが、新しいホームルーム棟が今年の十二月上旬には竣工の予定です。十二月中に必要な環境を整え来年一月の三学期からは、中学生も高校生もそれぞれ新しいホームルーム棟で勉強をすることになります。二つのホームルーム棟の間には中央館がありますが、この中央館を要として中学校と高等学校はこれまで以上に一貫性を強めた教育を実施することになります。

大学における新しい教育に対する展開は、二〇一〇年度から始める成蹊教養カリキュラムに対する取り組みです。これは、その理念に「個性の尊重と人格の陶冶」と「自力教育の礎を築く」ことをあげ、学部によらずすべての学生が一定の水準まで修得していくことが望ましいと考えられる内容を、共通のカリキュラムのもとで学ぶ新しい教育プログラムとなります。その中には、成蹊教育の特色として桃李成蹊科目と題する科目も準備されており、成蹊学園の建学の理念につながる科目と創立者の中村春二先生の思想から派生する内容を学ぶことになります。この成蹊教養カリキュラムは、リベラルアーツそのものです。この中で、国際性を育む教育の柱は英語教育と位置づけ、実践的なカリキュラムのもとで国際性を養うこととなります。今年度と来年度は、この科目群設定の準備期間として、将来の万全を期して二〇一〇年度からのスタートに備えるつもりです。

学園全体としては、今年十月を目標として環境保全の国際的な基準として定められているISO14001の認証取得をめざし、学園環境委員会を設置し取り組みを始めています。この活動は、キャンパス内の将来に向けた環境保護活動としても意味のあることですが、教育法人として成蹊学園の児童・生徒・学生を対象とした環境保全に向けた教育プログラムの活性化と、教員の環境関連の研究的な取り組みにも目を向けるものとなります。ぜひ、皆さまのご協力をいただきたいと思います。

成蹊学園は二〇一二年に創立一〇〇周年を迎えますが、現在二〇一二年に向けて学園創立一〇〇周年記念事業を展開しており、教育の充実とその具現化に必要な施設建設に取り組んでおります。この実現に必要な資金総額は約百六十億円ですが、そのうちの五十億円を募金事業で賄う計画で皆さまにご協力をお願いしております。現在期半ばを過ぎた時点で、約五〇%の募金達成率となっております。昨年度から、これまでご協力をいただいた募金を、各募金事業に資金・基金として割付け有効に使わせていただいておりますが、今後とも皆さまの温かいご支援とご協力を賜りたくお願いを申し上げます。

新年度を迎えて

学長・校長あいさつ

成蹊ブランドの維持と教育の質向上に向けて

成蹊大学長
栗田 恵輔 Keisuke Kurita

今年も多くの優秀な新入生を迎えることができました。皆さまが緑豊かで知的な刺激に満ちたこのキャンパスで大きく飛躍することを期待しています。

ご存じのように一八歳人口は減り続け、一九九二年に比べて約六〇%にまで落ちていますが、四年制私立大学の数は約四五%増えました。その結果、二〇〇七年度の入試では四割を超える私立大学が定員割れをおこしました。大学間競争はますます激しくなっており、本学でもいろいろな取り組みをしております。新年度にあたり、近況をご報告いたします。

入学試験

伸びる資質をもった学生を受け入れるために全学部統一入試を新たに導入し、同一日程で池袋サンシャインシティと本学を会場として実施しました。本学独自の二教科型で、入学後の勉学の基礎として欠かすことのできない教科にしぼって時間をかけて理解力を深く問う「基礎学力重視の入試」です。一回の受験で複数学部(文系三学部)に出願できることも特徴になっています。多くの志願者がありましたので、今後もこの入試によって潜在能力を見極めたいと考えております。

他の入試経路もあわせた志願者総数は前年を約一五%上回り、レベルの高い学生を確保することができました。学部別では文学部と理工学部の志願者増が目立ち、経済学部、法学部はほぼ昨年なみでした。

成蹊教養カリキュラム

大きな社会変動が地球規模で進んでいますが、とくに、知識基盤型社会への転換は急速であり、新たな知を創造し活用することが社会を発展させる鍵となっています。このように変動し続ける社会にあっては、創造性・豊かな知性とともに、いかなる変化にも対応できる能力を培うことが大学教育の課題です。

成蹊で教育を受け、卒業するからには一定水準以上の力を保証することが私の願いです。教養、基礎学力を十分に身につけてこそ専門的知識も生きてくると信じていますので、充実した教養教育は最重要な課題です。

新しい教育プログラムとして、ワンキャンパスの総合大学である利点をフルに生かした「成蹊教養カリキュラム」を編成しつつあります。このプログラムは学部横断的に実施するものであり、これまで専門科目を担当していた教員も積極的に関与し、文理融合教育と英語教育の徹底をめざします。文系・理系を問わずすべての学生にとって魅力あふれるものになるはずです。桃李成蹊科目、日本語力科目、キャリア科目なども含み、成蹊だからこそできる教育を二〇一〇年度に開始する予定です。

社会活動支援奨学金

学園創立一〇〇周年記念事業の一つとして新たに設定した「成蹊大学社会活動支援奨学金」は、教員との連携のもとに学生が行う社会貢献活動や調査研究活動を支援することを目的としています。学生と教員の距離が近い本学だからこそ可能になったものであり、学生の総合的な力を向上させるための奨学金です。昨年度が第一回の支給でしたが、「スリランカプロジェクト二〇〇七」「フェアトレード普及活動」「Vege Reivo JAS 規格外有機野菜又は減農薬野菜の普及活動」が選ばれ、多くの成果を上げました。学生が社会に目を向けて活動する契機になっていますし、他の学生にも良い刺激を与えています。

学生との対話

大学の改革には学生の意見が生かされることが必要です。意見箱「学長直行便」はすでに定着し、重要な役割を果たしています。ユニークな試みとして、朝日新聞の紙面でも紹介されました。

また、意見を直接聞くために「学長オフィスアワー」も開いています。学長室のドアを開放しており、予約なしで気軽に来られるようにしています。話の内容は、建設的な意見から陳情・苦情、世間話までさまざまです。

さらに、昨年度からはテーマを決めて意見交換をするための場として「学長と語る会」を設けました。これは学生との昼食会であり、今後も多くの学生と話をしたいと思っています。

大学の淘汰が始まっているなかで、成蹊というブランド力をさらに確かなものにする必要があります。大学に求められているのは何よりも高い教育力であると思っておりますので、さらに力を尽くす所存です。今後ともご理解、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

四度目の建学の時を迎えて

成蹊中学・高等学校長

谷 正紀　Masanori Tani

成蹊の春、新入生を迎える季節となりました。入学された皆さんは厳しい選抜にもかかわらず難関を突破され、今後の学校生活での活躍を大いに期待しております。

中学校の入試では、昨年の四科目入試への統一に続き、今年度は入試を二回にしました。二回合わせて応募者数は昨年度の二・二倍と大幅に増え、受験生も七〇％以上増加し、受験生のレベルも高くなっています。これらは同窓生ならびに在校生保護者の皆さまのご支援の賜と感謝いたしております。

高校生の大学進学については、進路が多様化するなかで今年度の成蹊大学への推薦入学は百十九名で、卒業生の三七％となりました。外部の大学については、生徒の多様な個性を生かし国公立大学、難関私立大学さらには成蹊の伝統である医歯薬系大学など、さまざまな分野へ挑戦し進学しています。今年度から、一定の条件を満たす生徒について成蹊大学推薦資格を留保したまま外部大学受験できるよう成蹊大学と推薦協定を見直し、十八名がこの制度を活用しました。これにより生徒の挑戦精神の昂揚と、より多くの優秀な生徒の成蹊大学への進学とが両立できることを期待しています。

さて、成蹊学園の長い歴史で、学園創立一〇〇周年は四度目の建学の時といえるのではと感じております。最初は一九二二年の中村春二先生による成蹊学園のまさしく創立の時です。次はキャンパスの吉祥寺移転と旧制七年制高等学校開設の時です。三度目は戦後の新制中学校、新制高等学校、および成蹊大学の開設の時です。そして四度目は創立一〇〇周年を迎える今日といえます。三度目の時期から数えてこの春の入学式は、中学校では六十二回目、高等学校では六十一回目となり、ともに六十余年の歳月が流れています。創立一〇〇周年に向け中村春二先生の建学の理念を未来に生かすため、中学・高等学校では「グローバルに認知される教養と個性の育成」、「協調性のある自立精神と自律的行動力の育成」、「知的好奇心と科学的探究心の育成」を教育のビジョンとして掲げ、その実現に向け一貫教育、全人教育、個性伸張教育を三本の柱として、教育の中身の一層の充実、教育の枠組みの改革、ならびに教育環境の充実に取り組んでおります。

教育の中身については中等教育の役割として「生徒個人が多様な個性を生かし、志望するいかなる進路も目指せる力」をつける教育や指導ということになります。とくに学習習慣の定着、将来への動機付けなどによるモチベーションの向上、学力の向上、将来を見据えた挑戦意識の向上が重点と考えています。各教科では導入、充実、発展期の各ステップにおいて生徒の成長目標、期待される獲得能力目標を明確にし、六年間の一貫したカリキュラムの充実により、学習意欲と学力のさらなる向上を図ることが求められます。モチベーションの向上、将来を見据えた挑戦意識の向上については、自ら才能、個性を考えさせ、将来像を描かせ、そこへ至るための道筋を考えさせる「六年間の進路指導」を、まず高校一、二年生を対象にスタートしました。最近、外部大学進学で推薦が多くなり安全指向になっていることが若干気になりますが、キャリア意識醸成教育と指導の充実により、自ら将来像を描き、それに向けて挑戦する姿勢が一層高まることを期待します。

国際理解教育はケンブリッジ大学への短期留学、オーストラリアのカウラ高校へのショートステイはじめ、国際交流面でも韓国、中国など多様な成果が出ました。今年も活発な活動を期待しています。

教育の枠組みについては、昨年度にクラス定員とクラス数見直しによる中学校での少人数クラス化、国際学級の位置付けの改革を行い、順調に立ち上げることができました。また、今年度から中学二年次以降の帰国生対象の特設英語教育プログラムも立ち上げます。

入試改革はモチベーションの高い生徒の獲得のため、塾、専門誌、入試相談会、学校説明会などの場で精力的な広報活動をしてきました。前述の中学校の二回入試化に伴う応募者、受験生の増加、偏差値の向上はその成果でもあり、さらに次年度の入試諸活動に生かしていきたいと考えています。

教育のさらなる充実のためには教育環境の整備が必要で、その第一弾として昨年夏に中学校新校舎が完成しました。引き続き高等学校の新校舎建築に着工し、本年十二月には完成の予定です。この素晴らしい学習環境を永く維持していくためには美化、整理整頓などの指導、環境やモノを大切にする心の醸成も大切であり、ご家庭の協力とともに進めていきます。

私ども教職員一同は、二十一世紀の成蹊学園、中学・高等学校の次なる百年の発展のために「伝統とともに飛躍しよう」の意気込みでたゆまぬ努力を続けてまいりますので、卒業生の皆さま、在校生保護者の皆さまの倍旧のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

「少人数教育」を支える環境づくり

成蹊小学校長

金納 善明　Yoshiaki Kinno

成蹊学園のすべての新入生の皆さま、そして保護者の皆さま、ご入学おめでとうございます。「吾らの園」に集われた皆さまに、心よりお祝い申し上げます。

全学年が二十八人学級へ

小学校は、いよいよ「少人数教育」を支える環境づくりが完成する年を迎えました。

一つ目は二〇〇五年度から段階的に二十八人四学級に移行してきた学級編成の完成です。

この四月からは、一年生から六年生までの全学年が東西南北の四学級で編成されることになりました。小学校では、一つの学級にとどまることなく、学年内の子どもたちの交流を大切な教育機会ととらえています。その意味では、従来の三学級の交流に比べ四学級の交流はさらに密度を増すばかりでなく、経験豊かな四担任の個性がいっそう学年経営を充実させることになると期待しています。

さらにまた、発達年齢の違う異学年間の子どもたちの交流も、子どもたちの心の発達に欠かせない教育刺激となります。移行期には学級数が異なる学年間の交流にいろいろな調整が必要でした。しかし、今年からはすべての学年の学級数が揃うことになり、さまざまな行事のなかで子どもたちの「縦割り意識」を活発にする異学年間交流が容易になるものと期待しています。

もちろん形式を優先させるだけの機械的な縦割りの導入は好ましくありませんが、遠足・運動会・文化祭・音楽会など小学校の全校行事をはじめとしたさまざまな場で異学年間交流の充実を検討する素地ができたと期待しているところです。

新校舎がいよいよ完成

二つ目は昨年五月から工事が進んできた新校舎の完成です。

これまでの本館教室棟や理科館、そして低学年の遊び場であったリトルグラウンドのすべてを敷地とした新教室棟が七月には竣工の運びとなりました。学園そして建設担当業者のご協力によって工事現場の壁に用意された透明板から工事の進捗状況を眺めてきた子どもたちも、今では姿を見せてきた階段式三階建ての新校舎の景観を見上げるようになりました。

この七月までの一学期間、子どもたちはトンネル山グラウンドの仮設校舎で過ごしますが、二学期からはいよいよ新校舎での生活が始まります。例年六月に実施している全校授業参観日も、今年は特別に九月に設定して、多くの在校生保護者の皆さまに新しい校舎をご案内できるよう計画しております。

これまでの本館教室棟では四十名以上を一学級定員とした時代もありました。これに比べれば、新校舎の最大三十二名定員の教室は狭く感じられるかもしれません。しかしながら、教室と同じ広さの南面ベランダと四教室の廊下側に広がるワークスペースとが、学年発達に応じた多様な学習機会を保障するものと期待しています。

木の柔らかな感触を大切にした新校舎は、私ども小学校が待ち望んだ「少人数教育」の重要な環境基盤となることは間違いありません。

よりよい教育環境づくりのために

このように、小学校は学園創立一〇〇周年記念事業「新・成蹊創造プラン」における小学校「少人数教育」を支える環境が整う年を迎えたわけですが、これらの環境を生かす私ども教員の研究・実践に終わりはありません。子どもたちの新しい環境を生かす英知は、教員集団の結束の中にこそ生まれるものと心新たにしております。

二十一世紀の小学校の教育目標は「自立・連帯・創造」の子ども像として掲げています。そしてこの教育目標は、期待される子どもの姿であるばかりではなく、子どもたちの学習と生活を支える学校環境や教員集団の方向性、そして在校生保護者の皆さまの姿として「自立・連帯・創造」が具現化されることを心より願っています。

皆さまの小学校教育に対するご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。

EartHa

環境マネジメントシステム(EMS)を始動しました

環境委員会の設置と、その使命

成蹊学園は、2006年4月に学園環境委員会を設置し、従来取り組んできた環境保全対策を組織的な活動へと発展させるべくつとめてきました。環境問題への取り組みは、現代社会において世界的課題と認識されつつあり、環境問題に貢献する研究の推進や人材の育成についての教育研究事業体の責任は増すばかりです。成蹊学園は、こうした社会的な責任を認識し、学園の環境保全対策の社会的信頼性の向上を図るため、その指針といえるISO14001の認証を2008年度中に取得する方針を定めました。各学校がこれまで独自に取り組んできた環境保全にかかわる諸活動や教育・研究活動を尊重しつつ、学園全体での組織的取り組みを進めるため、学園を「小学校」「中学・高等学校」「大学（経済学部・文学部・法学部など）」「大学理工学部」「法人」の五つの区域に区分し、それぞれに「区域環境委員会」を設置しました。

ISO14001 認定取得に向けて

2007年4月からは「学園環境委員会」のもとに新たに設置された「ISO14001推進部会」および五つの「区域環境委員会」が協同してISO14001の認証取得に向けた準備を進めています。2007年秋には教職員全員を対象としたアンケートを実施して、学園の諸活動が環境におよぼす影響（環境負荷）を明らかにしました。また、その集計結果にもとづいて「環境負荷を軽減することをめざす活動」および「環境の改善に貢献することをめざす活動」の二つの観点から今後学園が取り組むべき課題を決定しました。さらに、このうち3年間で達成をめざす中期的な「目的」と、それを計画的に達成するための単年度の「目標」を定めました。

特定された著しい環境側面とそれぞれについての中期的な目的・単年度の目標（案）

●マイナスの側面（環境負荷の軽減をめざす）

著しい環境側面	目的　2008〜2010年度（案）	目標　2008年度（案）
電力・ガスの使用	電気・ガス使用量の削減（3年間で3%削減）	電気・ガス使用量を2007年度（基準年）実績に対し1%削減する
水の使用	水の使用量の削減（3年間で1%削減）	水の使用量を2007年度（基準年）実績に対し0.5%削減する
紙の使用	紙の使用量の削減（3年間で2%削減）	紙の使用量（OA紙・封筒購入量）の把握方法を検討し、2008年度の実績を算出する
使い捨て容器・箸・レジ袋の使用	使い捨て容器・割り箸・レジ袋の削減	使い捨て容器・割り箸・レジ袋の削減の方法を検討・計画し、実施する
製品の購入	グリーン購入の取り組みを促進する	学園のグリーン調達方針を策定する グリーン購入法適合製品の情報提供を進めて積極的な購入を促す
化学物質の使用	化学物質の適正な管理を進める	化学物質の適正な管理を実施し、維持する

●プラスの側面（環境改善への貢献をめざす）

著しい環境側面	目的　2008〜2010年度（案）	目標　2008年度（案）
環境教育・学習プログラムの提供	小・中高・大学における環境教育・学習を推進する	小・中高・大学における環境教育・学習の機会を増やし、充実させる
環境関係の研究の実施	中高・大学における環境関係の研究を充実させる	中高・大学における環境関係の研究をさらに増やし、充実させる
環境問題に対する理解と関心の向上	学園における環境教育・学習について発信・公開するとともに自らの環境への意識を高める	学園における環境教育・学習について発信・公開するとともに自らの環境への意識を高める
地域とのコミュニケーション	地域社会とのコミュニケーションのさらなる充実を図る	地域社会とのコミュニケーションのさらなる充実を図る
環境の整備・緑の保全・充実	キャンパスの緑の維持と適正な計画による整備・充実を図る	キャンパスの緑の維持と適正な計画による整備・充実を図る

成蹊学園の環境マネジメントシステム

2008年度の目標達成に向けて、成蹊学園として、また各区域として進める具体的な計画や取り組み項目・管理体制などを決め、いよいよこの4月からは、成蹊学園の環境マネジメントシステム（以下EMS）の運用を開始します。EMSとは、「計画（Plan）、実行（Do）、確認（Check）、見直し（Action）」（PDCA）を繰り返すことによって、継続的な環境改善をめざすものです。EMSの運用開始により、目的・目標の達成に向けて教職員全員が一致協力して取り組んで行くこととなりますが、この達成のためには、学園に関わる多くの方々、児童・生徒・学生、保護者・卒業生の皆さま、取引会社の方々などに、ご理解とご協力をいただく必要があります。

成蹊学園は、小学校から大学院までの教育研究機関が緑豊かなワンキャンパスで一貫教育の伝統を継承してきた学園です。環境保全に関してもこうした特長を生かし、成蹊学園独自の環境保全対策の確立をめざします。皆さまのご理解、ご支援のほどよろしくお願いいたします。

各区域の2008年度の主な取り組み目標

■ 小学校	・野菜の収穫から調理までの一貫した食農教育の推進 ・環境に関する授業のカリキュラム充実 ・児童と教職員による校内の美化
■ 中学・高等学校	・省エネルギーに配慮した高等学校新校舎の建設 ・生徒会を中心としたリサイクル活動 ・資源の有効活用と環境美化
■ 大学 （経済学部、文学部、法学部等）	・環境をテーマとした講座の実施 ・ゴミの清掃や整理整頓による環境意識の醸成 ・学生環境委員会を中心としたエコ活動の支援体制強化
■ 大学理工学部	・薬品および高圧ガスの管理システムの運用開始 ・環境に関する教育研究活動の促進
■ 法人	・地域清掃活動の定着と継続 ・沿道緑化の推進 ・学園の環境への取り組みの周知・マナー向上

インタビュー

桃李の人々 vol.17

卒業生ロングインタビュー

政策研究大学院大学教授／内閣特別顧問

黒川　清

Kiyoshi Kurokawa

UCLA教授、東京大学名誉教授、日本学術会議会長、内閣特別顧問など、国内外の重要な役職を歴任。腎臓内科の国際的なプロフェッショナルとして、また日本を代表する論客として、世界を舞台に活躍されているのが黒川清さん。豊富な国際経験を背景に、今後の成蹊学園の改革に関して、さまざまな提言をいただきました。

成蹊学園の強みは「国際性」にある！それをさらに拡充して世界に通用する「プロ」を育ててほしい

―印象に残っている先生はいらっしゃいますか。

黒川　度量が広く、偏見のない先生ばかりで、リベラルな校風が形成されていました。今振り返ってみると、書家の上條信山先生、俳句の中村草田男先生、百十メートルハードルの選手として著名な高柳茂先生、数学の奥住正彦先生など、錚々たるメンバーだったことに驚きます。子どもですから、有名な先生方に教わっているありがたみを理解していたわけではありませんが……。授業は、そんな先生方がガリ版で作成した教科書で行われていました。

　先生と生徒の間も緊密で、正月に友人たちと連れ立って、英語の藤井一美先生のご自宅に集まり、百人一首で遊んだことを覚えています。

―医師をめざそうと考えられたのは、いつごろからですか。

黒川　先祖が肥後細川藩のご典医で、代々医師の家系の長男として生まれたので、家業を継ぎ、医師になるものだと素直に考えていました。

　私のクラスはけっこう成績が良く、東大にたくさん合格するのではないかと、期待されていました。私も東大医学部をめざすことにしたのですが、途中から、皆そろって、あまり勉強しなくなってしまいました。周囲からおだてられすぎて、実力を過信してしまったわけです（笑）。結局、東大に合格したのは三名だけでした。その分、翌年は、私も含めて浪人してからがんばった生徒が大挙合格したので、東大の合格者数は全国で十一位、私学では麻布に次いで二位に躍進しました。

　浪人時代の思い出は、夏の高校野球です。成蹊高校が東京都予選の決勝戦まで進み、甲子園への切符をかけて、早実（早稲田実業学校）と対戦することになったのです。めったにないことですから、私も張り切って球場に応援に出かけました。ところが、早実のエースは、一年生だった王貞治さん。大差で負けてしまいました。ちなみに、翌年も一回戦で早実と当たり、再び大敗しました。二年連続で王さんの軍門に下ったわけです。

―偏見のない先生方のもとリベラルな校風を形成―成蹊学園で学ばれたのは、中学校からですね。

黒川　小学生のころは体が弱く、結核にもかかっていました。食糧事情が悪く、特効薬もない時代であり、冬は風邪をひきっぱなしで、ほとんど学校を休んでいたような状態でした。

　それが、成蹊中学校に入学してから、みるみる元気になっていきました。桜が咲き、欅の木が繁る自然に恵まれた環境が良かったのでしょうか。ほぼ皆勤に近くなり、昼休みは前庭でソフトボール、冬はラグビーを楽しんでいました。

長期間海外にとどまったのは「東大的」ではなく「成蹊的」!?

――大学を卒業してから七年目に留学され、その後、UCLA内科教授に就任されるなど、海外でキャリアを積まれたわけですが、どのような思いがあったのでしょうか。

黒川　日本の医師は、卒業した大学の付属病院、関連病院でキャリアアップを図るのが一般的です。たとえ留学しても、二～三年のリサーチ・フェローをして帰国するのが、暗黙のルールになっていました。それ以上の長期間を、大学の許しもなく独断で過ごすと、閉鎖的な医局の「規定路線」からはずれてしまい、帰国後の保証はなくなります。ですから、私も当初は、二～三年で帰国するつもりでいました。ところが、アメリカで研究の面白さに目覚め、帰国を先延ばししているうちに、医局の「ムラ社会」の掟を破った者と見なされ、戻れる雰囲気ではなくなっていったのです（笑）。

――アメリカと日本では、研究体制に何か違いがあるのですか。

黒川　私にとっては、ペンシルバニア大学のラスムッセン教授との出会いが転機になりました。初対面で教授から言われたことは「あなたは私が指示したことを研究するために留学してきたのではないでしょう。自分が独立した研究者に成長するためにきているのなら、自分の好きなことをやって、自己実現を果たしなさい」ということでした。日本のやり方と同様に、先生の指示通りに研究すればいいと軽い気持ちでいたのに、内心これは大変なことになったと思いました。もちろん、そうはいっても、適当に研究をして、お茶を濁すことも可能でしたが、そこで私には意地、反発精神が芽生えました。「よし、すごい研究をやって、驚かせてやろうじゃないか」と。それから図書館に通い詰めて、定説とは異なる視点、発想のテーマを模索し、二年間、腎臓の細胞機能に関する研究に没頭しました。

　そのほか、日本の医師免許はアメリカでは通用しませんから、カリフォルニア医師免許をとり、次いで米国内科専門医、米国内科腎臓専門医の資格も取得しました。私にとっては、三十代半ばが最も真剣に勉強した時期ですね。

――そのまま、約十五年間、アメリカで研究生活を過ごされたわけですね。

黒川　出世の階段を順調にのぼっていきたいと考えるようなタイプだったら、さっさと帰国していたはずです。私には、人を押し退けてでも出世したいという欲はなかったし、枠にはまらない生き方でいいじゃないかという意識もありました。その感覚は「東大的」ではなく「成蹊的」なものかもしれません（笑）。

　アメリカは競争も激しい反面、がんばっている人は、性別も国籍も関係なく正当に評価するフェアなシステムが守られています。それに感動し、日本の保守的な体制を疑問視するようになったのは、成蹊学園で、受験一辺倒ではない、自由な環境で学んだ影響が大きいと思います。先ほど申し上げたように、成蹊学園の先生方は偏見がいっさいなく、リベラルな雰囲気に満ちていました。中学・高等学校時代にとくに意識していたわけではありませんが、そういう先生方と一緒にいることで、柔軟な価値観が自然と醸成されていった気がします。

――アメリカで心地よく過ごされていたのに、帰国を決意されたのは、どのような理由からですか。

黒川　UCLAの教授になり、生活も安定し、高台にプール付きの家を建てて、「ハッピネスとはこんな生活かな」と感じたりしたものです（笑）。

　ところが、そんな時、東大の先輩教授が「これからの東大には、あなたのような人が必要だ」と、口説きにきてくださったのです。そこまで言ってくださるのは、やはりありがたいことでした。また、二人の子どもが、バイリンガルではあるものの、日本で暮らした経験がない。自国の文化を知らないことは、日本人としてのアイデンティティを失ってしまうのではないかとの危惧もありました。そこで、一時にしろ帰国を決意したのですが、日本の家は狭くて、子どもたちからは随分不満を聞かされました（笑）。

セントポールズ校などへの交換留学制度の拡充を望む

――成蹊学園の今後の方向性について、ご意見をお聞かせください。

黒川　今後の私学が考えなければならないのは、強みを伸ばすことです。それも付け焼き刃的なものではなく、建学の精神や歴史的事実に裏打ちされた特色を強化することが肝心です。

　では、成蹊学園のバリューとは何なのか。私は建学の基本と国際交流の伝統にそれを見出すべきだと考えています。とくに、アメリカのセントポールズ校や、オーストラリアのカウラ高校との交換留学は素晴らしい制度です。その効果が大きいことは、槇原稔さん（三菱商事相談役）、有馬龍夫さん（日本国政府代表）、入江昭さん（ハーバード大学名誉教授）など、セントポールズ校への留学を経験された方々の

黒川　清（くろかわ・きよし）

東京都生まれ。成蹊中学・高等学校を経て、東京大学医学部卒業、同大学院医学研究科修了（医学博士）。1969 年、ペンシルバニア大学に留学。後にカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）に移り、1979 年、内科教授に就任。1983 年に帰国し、1989 年、東京大学医学部第一内科教授、1996 年、東海大学医学部長、1997 年、東京大学名誉教授、2003 年、日本学術会議会長などを歴任。現在、政策研究大学院大学教授、内閣特別顧問（科学、技術、イノベーション担当）を務める。『医を語る』（共著／西村書店）『世界級キャリアのつくり方』（共著／東洋経済新報社）など、著書多数。1999 年、紫綬褒章受勲。ホームページ :www.kiyoshikurokawa.com

――現在、学園創立一〇〇周年記念事業の一環として、国際教育センターが発足するなど、国際交流強化に向けての取り組みがスタートしています。

黒川　それはとても重要なことです。日本はアジアの大国と慢心しているかもしれませんが、近年、アジア圏の国々の経済成長は目ざましく、しかも、リーダー候補の若者は、欧米の高等教育に学び、英語も話し、異文化を吸収しています。対して、日本の英語教育は立ち遅れ、異文化への認識もきわめて希薄です。このままでは世界から取り残されてしまいます。もはやグローバルランゲージはブロークン英語になっているのですから、外国人留学生を数多く受け入れると同時に、一部の授業は英語で行えばいい。それぐらいの迫力のある教育をめざしてほしいですね。そうしたグローバル化を意識した教育を行い、世界に通用する「プロ」を育てていかなければ、日本の未来は暗いと言わざるを得ません。活躍の場が日本に限定される「鎖国マインド」から脱皮することが重要で、そのためにも、若いうちから海外に飛び出すチャンスを与える、セントポールズ校などとの交換留学制度の拡充を期待しています。

文系、理系の枠を超えたリベラルアーツ型学部への転換

――二〇二五年の社会について検討する「イノベーション25戦略会議」の座長を務められ、大学改革についても斬新な提言をされていますね。ご意見をお聞かせください。

黒川　「イノベーション25戦略会議」で、私が強く提唱したのが、大学入試の抜本的改革です。具体的には、入試段階で文系、理系の区分を廃止することを想定しています。この区分があるから、受験勉強効率化のために、高校では低学年から文理のコース分けを行っています。その弊害は計り知れません。入試を一本化し、全学生にリベラルアーツ教育を実施すべきです。そうすることで、哲学や歴史に裏打ちされた深い洞察力や思考力が養えます。将来の基盤となる幅広い基礎知識を修得することによって、多様な価値観を身につけ、自分の可能性を広げ、人生の目標を模索することもできるはずです。その上で、各自が本当に学びたいこと、なりたい職業に就くための専門教育を選択する。今後の大学は、そんな教育システムに変貌していく必要があります。

　また、教員スタッフの活性化も重要なテーマになります。本物の国際派プロは、組織や肩書、性別、国籍に関係なく、自分の能力によってキャリアアップを図っていきます。「個のウデ」で勝負しているわけです。そのあたりの感覚が、日本は世界規準から大きく遅れています。たとえばパーティーで、自己紹介する際に、日本人は「○○銀行の者です」と、会社名を冠する。外国人なら「アイム　アバンカー」と名乗ります。この違いが、日本特有のものだということを、日本人はもっと認識すべきです。

　当然、大学は他の組織以上に「個のウデ」で戦える集団でなければならない。そのためには、徒弟制度的な男性主体のヒエラルキーから脱却して、もっと女性や外国人を登用してほしい。ちなみに、アメリカのアイビーリーグは、八大学のうち四大学のトップが女性です。それに対して、残念ながら、日本は八十数校の国立大学のうち、女性学長は一大学のみです。私学を含めても女性学長は五％程度に過ぎない。これではダイナミックなイノベーションは望めません。異なる感性を持つ人材が混在することこそが、大学と教育の活性化につながるのです。

　繰り返し述べてきたように、成蹊学園の良さは、国際性とリベラルな校風にあります。その強みをより発揮するためにも、積極的に女性や外国人に活躍の場を提供する大学像をめざしてほしいと願っています。

（広報課）

アメリカの外交史 ～その根源的な問題～

大学・法学部

アメリカ外交史
西崎（にしざき） 文子（ふみこ） 成蹊大学 法学部教授

東京大学教養学部卒業。一橋大学法学研究科修士号取得。イェール大学歴史学部博士課程終了、博士号（Ph.D）取得。フルブライト奨学生、国際交流基金安倍フェロー。ハーバード大学、ラトガーズ大学、ケンブリッジ大学客員研究員など。1998 年より現職。著書に『アメリカ冷戦政策と国連 1945 － 1950』（東京大学出版会）、『アメリカ外交とは何か』（岩波新書）など。

アメリカとはどのような国か

アメリカには本当にいらいらさせられる――アメリカを外から見て、そう思う人は少なくないのではないでしょうか。素晴らしい物品を生産し、知識や技能にも優れ、多彩な音楽や映画で人々を魅了する力をもっているアメリカ。しかし、同時にアメリカは尊大で、自己中心的で、自国の経済的利益を強引に追求して世界を混乱させ、果ては戦争で各地に荒廃をもたらしながら自分たちは世界で一番の国と公言してはばかりません。私のアメリカ外交史研究の根底には、このような矛盾がなぜ、どのように生じるのかを理解したいという欲求があります。言い換えるならば、アメリカとはどのような国なのかという大きな問いを背景に、アメリカの対外行動の特徴を分析するというのが私の問題関心です。

大阪 国立民族学博物館でのシンポジウムで

その場合、アメリカ外交に見られる矛盾や逆説を解明するための一つの方法として、私が進めているのが、アメリカと国際秩序との関係に関する研究です。周知のとおり、ウィルソン大統領は、第一次世界大戦のときに国際連盟の創設を提唱し、これを実現に導きますが、肝心のアメリカはこの国際組織に加盟しませんでした。そのときの自国の行動を反省したアメリカは、第二次大戦中に新たな国際組織の結成を推進し、国際連合を創設します。国連本部がニューヨークに置かれたことは、国際社会の組織化こそが平和の礎であり、アメリカの国益にも寄与するという当時の新しい認識を象徴していました。

アメリカと国連の関係

しかし、それから六十年あまりたって、アメリカと国連との関係は、良く言っても不安定であり、時としては敵対的ですらあります。日本政府が、たとえ建前だとしても、国連や国際世論を枕詞として日本の外交政策を説明しようとするのとは対照的に、アメリカでは、国連の意向や各国の世論の動向を重視する指導者はごく限られています。アメリカの政策と国連の決議とが対立する場合には、間違っているのは国連であり、アメリカは独自の判断で正しい政策を追求するのだと主張することすら珍しくありません。

ニューヨーク大学M.ヤング教授を囲んで津田塾大学の藤田文子教授と

アメリカの自負、そして優越性

アメリカは、なぜ一方では自分たちが世界の利益を実現する使命を担うのだと主張しながら、他方では世界各地の多様な意見に積極的に耳を傾けようとしないのでしょうか。その背後には、自分たちこそが、近代民主主義の理念を掲げて誕生した「普遍性」を持つ国家であるという自負が、アメリカの優越性を裏付ける根拠としてとらえられ、アメリカのナショナリズムを煽ることにつながっているという「逆説」が存在するというのが私の見方です。

日本における「アメリカ体験」は、世代によって大きく異なります。戦争と占領を経験した世代、安保闘争の世代、ヴェトナム戦争世代、ポスト冷戦世代、そして今、私が教えているのはポスト9・11世代といえるでしょうか。そのようなさまざまな「アメリカ体験」によりそいながら、アメリカ外交史から見えてくる根源的な問題とは何かを考えていくのが、私の研究課題であり、また教育の課題でもあります。

ことばと格闘中

小学校

国語科教育
木下（きのした） ひさし 小学校教諭

東京学芸大学、同大学院修了。1989年より現職。著作に『読み合う教室へ』『ことば遊びの王様』『国語科授業用語の手引き（共編）』『国語教室宣言（共編）』『子どもたちのことば探検（共編）』など。小中学校国語科教科書編集委員。日本文学協会、日本作文の会、日本児童文学学会、日本国語教育学会等に所属。

成蹊との出会い

卒業論文を書かなくては、でも何を書こうかと迷っていた学生時代の後半ころ、ひとつの方向性を示してくれた本があります。滑川道夫著『映像時代の読書と教育』という新書版の小さな本です。滑川氏の膨大な著作群のなかではさほど注目されてはいませんが、私にとっては忘れられない本です。ことばの教育ってなんだか面白そうだぞと思わせてくれたのです。

「成蹊」と出会った3冊の本

卒業後、四年間の小学校現場経験を経て大学院に進みました。国語科教育専攻でした。そこで国語科教育史の基本的な文献として示されたのが、飛田多喜雄著『国語教育方法論史』でした。国語科教育の歴史は単なる読み書きの歴史ではないことを知らされました。

そして、子どものことばの教育を自分の研究課題としたとき、研究室の薄暗い書架で基礎資料として見つけたのが、西原慶一著『日本児童文章史』でした。

この三冊の著者の経歴を見て驚きました。三氏とも成蹊小学校という小学校の教師をしていたのです…。

これが私と成蹊小学校との「出会い」でした。国語科教育史に大きな足跡を残す三氏が勤めていたという学校、いったいどんな学校なんだろうと当時は思ったものでした。ちなみに、後から知ったのですが、一九三九年から一九四一年までの三年間はこの三先生は同時に成蹊小学校で学級担任をしておられたのでした。

伝統に連なりつつ

その学校に今自分がこうして在職しているとはなんとも不思議な縁を感じます。この三先生をはじめとする諸先輩から続く「成蹊」の伝統を担っていかなければならない責任も感じます。

ただ、伝統といってもそれは昔ながらの材料で昔ながらの授業を行うということではないでしょう。それは、目先の流行やら社会状況に左右されず、子どもにとって大切なことは何かという本来の教育のあり方を今日的に追究し実践していく姿勢だろうと勝手ながら考えています。

古くて新しきもの

本稿が目にとまるときには新しい学習指導要領が告示されているはずです。その要領の国語科編成過程で強調されてきたのが「PISA型読解力」というものです。詳しい説明は省きますが、簡単にいってしまうと、映像や図表といった多様なテキストを読解し表現していく力です。一部では今日的で新しい考え方のようにとらえられましたが、滑川先生の先の著作には同様の内容が書かれているのです。ことの本質は変わっていないということでしょうか。

『思考と行動における言語』（S・I・ハヤカワ著、大久保忠利訳）という本があります。「一般意味論」という理論の解説書として半世紀以上も前に書かれたものですが、そこで示される内容は十分に現代の国語教育、つまり言語の教育に生かせるものです。いや、IT時代と呼ばれる現代にこそ生かさなければならない言語論なのです。

このように、新しいようで古い、古いようで新しいのが国語科、すなわち「ことば」の教育です。先の読解力養成といった現代社会からの要請という今日的な課題にも対応しなければなりません。その一方で、ことばが人間形成に深くかかわることを考えれば、言語操作の教育のみで国語科教育を終わらせてはなりません。こういう現代だからこそ例えば優れた文学作品の持つ教育的な力も考えていきたいのです。

と、日々「ことば」と格闘しています。でも、ことばは友だちです。

理科フィールドワーク 秩父・長瀞にて

学長と語る会
～卒業を控えた四年生と一緒にランチ編～

学長と成蹊生の交流プログラム「SEIKEI架け橋プロジェクト」の第三弾として二〇〇七年度からスタートした「学長と語る会」の第三回が、二月六日、学長室において開催されました。今回は「卒業を控えた四年生と一緒にランチ編」といったテーマで開催され、体育会本部から一名、文化会本部から一名、檫祭本部から二名、新聞会から一名、計五名の四年生が参加し、本学で過ごした学生生活について、後輩たちに伝えていきたいことなどを語りました。

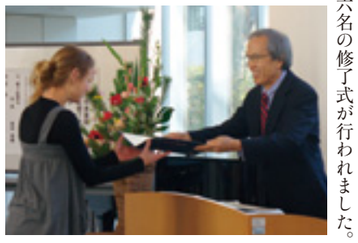
卒業を一カ月後に控えた五名からは「大学生活を通して多くの『いい出会い』に恵まれた。人とのつながりの大切さを知った」といった声や「就職活動を通して成蹊大学の社会における評価の高さを知ることができた」といった声が聞かれました。また、学長から本学の授業に関する感想を聞かれると「一年次から参加したゼミの授業は印象的で、先生との距離も近く、多くのことを学ぶことができた」といったゼミを中心とした少人数教育を評価する声や、「せっかく総合大学に入学したのだからもっと他学部履修を活用すればよかった。四年次になってから他学部履修制度を知ったので、今後は在学生のためにもう少しその制度について広報をしてもらいたい」といった提案が聞かれました。

和気あいあいとした雰囲気のなかでも、自らの意見をしっかりと語る彼らの姿勢からは、充実した四年間を過ごし、成長してきた様子をうかがい知ることができました。

長期協定留学生修了式

二月一日、本学国際交流会館にて二〇〇七年度長期受入協定留学生六名の修了式が行われました。

留学生のスピーチを聞き、学生アドバイザーとして国際交流会館で生活し、留学生をサポートしてきた日本人学生が涙を浮かべる場面もあり、日本人学生と留学生たちの充実した日々をうかがい知ることのできる修了式となりました。



～修了生スピーチより～

わたしが今どんなに嬉しいのか、言葉ではあらわせません。でも私にとって、今年は人生で一番良い経験になりました。そして、いつのまにか今年は終わってしまいました。

はじめは、わたしの日本語がへんだったから日常生活はとっても難しかったです。失礼なことをしたくなかったから、日本人と話すことができなかったです。でも、だんだん話さなければ友達になることができないと気付いて、話すことができるようになりました。

日本に来る前は、日本に来たら自分のことはすべて自分でやらなきゃいけないと思っていました。でも違いました。私たち留学生のために色々と手伝ってくれる人がいっぱいいました。

学校のSISが助けてくれました。ありがとうございました。でも、とくにアドバイザーは、私たちが困っているとき、いつもそばで助けてくれました。花見やハロウィンパーティ、高尾山ツアーなど、あなたたちのおかげでわたしは本当に楽しかったです。管理人の中村さんは、いつもおかえりなさい、いってらっしゃいと言ってくれました。日本語を教えてくれた先生方、わたしたちのために色々と辛抱してくれてありがとうございました。成蹊の先生たちが一番好きな先生でした。

このあとバラバラになっても、おばあちゃんになっても、みんなのことは忘れません。

いろいろなところに連れて行ってくれて、教えてくれてありがとうございました。

モナシュ大学交換協定留学生

二〇〇七年度　国家試験合格実績

各種国家試験の合格実績は、次のとおりです。

●司法試験十六名［新制度十六名］
●国家公務員試験Ⅱ種　在学生五名

＊二〇〇八年二月末現在キャリア支援センター届出分

全学部統一入学試験

二月三日、二〇〇八年度より新たにスタートした「全学部統一入学試験」が実施されました。出願者数は五千三百六十四名となり、本試験に対する関心の高さがうかがえました。

試験当日は降雪となり、交通機関の乱れなどが心配されましたが、池袋サンシャインシティ、本学の二会場ともに大きな混乱はなく、五千二百三十六名の受験生が試験に臨みました。

成蹊大学賞　表彰式

本学では、学術、芸術、スポーツ、文化活動、社会活動の各分野で他の学生の範となる活動を行い、優秀な成果をあげた個人および団体に日ごろの努力を称え、「成蹊大学賞」を授与しています。

二〇〇七年度は二十八件の応募があり、厳正なる審査の結果、左記の方々が受賞されました（受賞者の学年は受賞時のものです）。

表彰式は、十二月十八日、本館大講堂において行われ、学長より賞状と副賞として金一封が贈られました。

前期公開講座のご案内

本学では、年二回公開講座を開催しています。

前期公開講座テーマ「西洋文化史異聞」

第一回　五月三十一日（土）
第二回　六月七日（土）
第三回　六月十四日（土）
第四回　六月二十一日（土）

時間は各回とも十三時三十分から十五時三十分までです。会場は、大学八号館一〇一教室となります。

詳細につきましては、決定次第左記ホームページでお知らせします。

《ホームページアドレス》
http://www.seikei.ac.jp/university/index.html

2007年度　成蹊大学賞・特別奨励賞　受賞者一覧

●成蹊大学賞

部　門	団体名・個人名	表彰理由
学術部門	ナノテクノロジー研究室 <グループ表彰> 斎藤　漠興（工学研究科前期2年） 大島　和敏（工学研究科前期2年） 川田　美香（工学研究科前期1年）	日本で開催された初の摩擦の国際会議で、ポスター発表を行った優秀な研究者へ贈られる「Excellent Poster Award」受賞を評価した。
	田邊　祐騎（工学研究科前期2年）	日本キチン・キトサン学会でポスター賞を受賞したことを評価した。
芸術部門	佐藤　由奈（文学部3年）	全日本演奏家協会が主催するコンクールの中でマスターズ（名人、指導者、音楽学校および音楽を専門にしているプロの演奏家）を対象としたコンクールでの優秀賞を評価した。
スポーツ部門	体育会馬術部所属 筒江　麻亜耶（法学部3年）	学生女子日本一を決める全日本学生馬術女子選手権において上位進出したことを評価した。
	体育会ラグビーフットボール部	昨年の入替戦で見事Aグループに昇格し、成蹊大学のラグビー史に新たな足跡を残したことを評価した。

●特別奨励賞

部　門	団体名・個人名	表彰理由
学術部門	情報分析プログラム <グループ表彰> 水嶋　麻紀子（経済学部3年） 浅見　和正　（経済学部3年） 鈴木　梢子　（経済学部3年） 高木　光紗　（経済学部3年）	統計グラフコンクールは、統計知識の普及向上と統計の表現技術の研鑽を目的とした日本で最大の統計グラフの発表の場となっている。東京都と全国の両方で上位入選したことを評価した。
スポーツ部門	体育会漕艇部所属 高橋　真理（経済学部4年）	女子シングルスカルに出場し上位入賞したことを評価した。
	体育会ライフセービング部所属 岡野　彩（経済学部3年）	日本一また学生日本一を決める大会において、上位入賞したことを評価した。

2008年度　学年暦

行　事	大　学	法科大学院
入学式	4月3日（木）	4月3日（木）
オリエンテーション	3月28日（金） ～4月8日（火）	3月29日（土） ～4月2日（水）
健康診断	4月1日（火） ～7日（月）	在学生 4月1日（火） 新入生 4月5日（土）
前期授業開始	4月9日（水）	4月4日（金）
前期祝日授業日	4月29日（祝）	4月29日（祝）
学内陸上競技大会	5月29日（木）	
学内競漕大会（レガッタ）	6月18日（水）	
火曜日不足分授業日	7月12日（土）	
月曜日不足分授業日	7月18日（金）	
補講日	5月24日（土） 6月28日（土） 7月5日（土） 19日（土）	7月18日（金） ～24日（木） 21日（祝）
前期授業終了	7月19日（土）	7月17日（木）
前期試験	7月21日（祝） ～8月1日（金）	7月25日（金） ～8月2日（土）
夏期休業期間	8月2日（土） ～9月18日（木）	8月3日（日） ～9月24日（水）
夏期集中講義期間	9月8日（月） ～9月12日（金）	
後期授業開始	9月19日（金）	9月25日（木）

行　事	大　学	法科大学院
学位授与式	9月27日（土）	9月27日（土）
四大学運動競技大会	10月24日（金） ～26日（日）	
後期祝日授業日	11月3日（祝） 12月23日（祝）	10月13日（祝） 11月3日（祝） 12月23日（祝） 1月12日（祝）
欅祭期間	11月21日（金） ～24日（祝）	
冬期休業期間	12月25日（木） ～1月7日（水）	12月25日（木） ～1月6日（火）
後期授業再開	1月8日（木）	1月7日（水）
月曜日不足分授業日	1月14日（水）	
補講日	11月1日（土） 12月6日（土） 1月10日（土） 15日（木）	1月21日（水） ～27日（火）
後期授業終了	1月19日（月）	1月20日（火）
後期試験	1月20日（火） ～31日（土）	1月28日（水） ～2月7日（土）
春期休業	2月2日（月）～	2月8日（日）～
学位授与式	3月19日（木）	3月19日（木）

父母懇談会開催予定のお知らせ

日　程：6月14日（土）
対　象：経済学部　2年次生保証人
　　文学部　3年次生保証人
　　法学部　2年次生保証人

5月に入りましたら、開催日程などの詳しいご案内状と出欠葉書をお送りいたします。ご参加をお待ちしております。

中学・高等学校の近況

中学スキー教室

十二月二十一日から二十四日まで、志賀高原横手山で、中学校一年生、二年生の希望者三十九名が参加してスキー教室が行われました。スキー教室の目的は大自然に親しみながら、生涯スポーツにもなりうるスキーの楽しさを体感するとともに、規律ある団体生活を通して仲間作りをすることです。講習は初心者から上級者まで五班に分かれて行われました。今年は雪に恵まれ、パウダースノーのゲレンデで、思いっきりスキーを楽しむことができました。

入学試験

二〇〇八年度入学生のための入学試験は、一月九日の中学国際学級入試を皮切りに二月一日、四日に中学一般入試、十日に高校一般入試、さらに十四日には高校帰国生入試が行われました。

中学一般入試は今年から二回入試を実施しました。学校説明会、入試相談会などの広報活動が功を奏し、応募者増となりました。

高校一般入試の応募者数は昨年に比べやや減少しました。少子化、私学の男子校・女子校からの共学化や都立高校の復活など厳しい情勢の中で、今後も成蹊中学・高等学校はその存在と魅力をさらに流布すべく努力を重ねる所存です。

耐寒健歩会・マラソン大会

二月十九日、中学で健歩会が行われました。当日は好天に恵まれ、春浅い陽光の中、狭山湖一周・約十八キロを全員元気に励ましあいながら歩きおおせました。

同日に高校は国営昭和記念公園でマラソン大会を行いました。男子は八・五キロ、女子は四・五キロを一、二年生の十六クラス対抗で競って走行しました。参加した生徒全員が完走し、しかも女子は制限時間内に全員がゴールするという快挙でした。閉会式では校長から男子二十五位、女子二十位までの生徒に賞状とトロフィーが手渡されました。

高校演劇部「米本一夫賞」「生徒審査員賞」受賞

「日韓友好 TOKYO ドラマフェスタ vol.9」（第四十九回東京都私立高等学校演劇発表会）において、高校演劇部は『月下 雪の段』（宮本浩司作）を好演し、米本一夫賞と生徒審査員賞を受賞しました。

顧問からの報告

【五〇年後 ～「月下 雪の段」受賞に寄せて～】

高校演劇部顧問　宮本浩司

この秋、夏の関東の演劇祭から十月の地区大会まで長い時間をかけて作ってきた舞台が上の大会へ進めずに終わる結果となった。皆、泣いた。悔しいよりも、部員達の苦労と努力を思うと、終わってしまう寂しさ、受験を迎える二年生には最後の舞台となってしまうことが残念でならなかった。もう一度、舞台に立たせたい、彼らを輝かせたい、そんな想いで生まれた脚本は、短い練習期間だが、部員一人ひとりが人物に魂を吹き込んで、まさに活きた舞台となった。その結果の最優秀賞であり、生徒から最も支持された生徒審査員賞の受賞となった。講評で「美しい舞台」と賞賛された。それは、演技・音響・照明、この舞台に関わる全員が一つのテーマに向かって揺るぎなく作り上げている美しさだと説明された。こんな褒め言葉は今までにない。生徒と共に心から喜んだ。校舎の建て替えで、思い出の場所がなくなってゆくが、芝居のラスト、五〇年後老人となって母校を訪れた主人公の上に、亡くなった友の想いが雪になって舞い落ちる。「お～い、みんな、戻ってこいよ」五〇年後の部員達は…？ 学校は、戻ってくれれば、あのころの自分に出会える場所、笑顔で戻ってこられる場所でありたいと思う。

天文気象部 地球惑星探査学会に参加

部員からの報告

【高校生活において指針となるもの】

三年E組　飯嶋カンナ

私たち天文気象部は、顧問の宮下先生の提案で、地球惑星探査学会に発表の機会を得ることができました。この学会は理系の大学院生や科学者で構成されるもので、本来なら私たちのような若輩者は参加できないものです。

私たちが取り組んだのは「振動機を使った小惑星イトカワの地形再現」というアナログな実験でしたが、コンピュータで計算するだけの実感のわかないものではなく、目で見て確かめることのできる研究でした。研究の間は朝から夜まで試行錯誤を繰り返す毎日でしたが、とても幸せな経験でした。また、その成果を最高の場所で発表できたのはとてもありがたいことでした。一つのことに真剣に打ち込む、という熱血を大切にしようと決意を新たにでき、部員をはじめ宮下先生に感謝しています。

運動部・文化部の活躍

●高校吹奏楽部

第31回東京都高等学校アンサンブルコンテスト（東京都高等学校吹奏楽連盟主催）

木管八重奏　銀賞、金管七重奏　銀賞

●中学美術部・OB

第53回全日本学生美術展　特選3名、佳作1名

〈特選〉

五月女由佳（中2）

「何故（どこ）かにある地底湖」

大河原彩子（中3）

「THE INSPIRATION ～ダリアの花のイメージ～」

白石萌々奈（中3）

「あっという間に過ぎる時間」

〈佳作〉

松岡慶悟（高1）

「神秘」

小学校の近況

十四年目を迎えた全校音楽会

武蔵野市民文化会館を会場にして行われる全校音楽会も第十四回を迎えました。今回もPTA役員の方々に会場整理のお世話をいただき、どなたもが楽しんでいただける気持ちのよい音楽会となりました。会を重ねるごとに、子どもたちの歌声が向上していると感じます。参観の保護者の皆さまから大きな拍手をいただいた各学年の発表を紹介します。

●第十四回全校音楽会（十二月十三日）

［全校合唱］「How wonderful living together !」

［一年生］　斉唱「星の色」「黄金の橋―踊りと共にハッピー・メロディ」

［二年生］　斉唱「うたを・うたうとき」、群読「あいうえおうた」、合唱「みつけよう大切なもの」

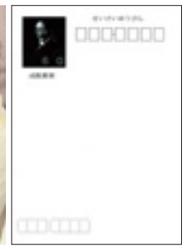
［三年生］　リコーダー合奏「赤い屋根の家」、合唱「今日から明日へ」、ボディパーカッション「手拍子の花束Ⅱ」

［四年生］　合唱「See You」「Sing Forever」、リコーダー合奏「La vie d' escargot（かたつむりの一生）」

［五年生］　合唱「Believe」「FACE」、リコーダー合奏「喜びの歌―交響曲第九番「合唱」第四楽章より」

［六年生］　合唱「HEIWAの鐘」「ぼくの空にも明日はくる」、リコーダー合奏「交響曲第九番「新世界より」第四楽章」

二年生「せいけいいゆうびんきょく」



二年生が「こみち」科で郵便局の体験学習を行いました。仮設校舎にポストを置き、中村春二先生を印刷したはがきも用意しました。そして各学級で郵便を収集し、学年で決めた郵便番号を頼りに係の子どもが全校に配達するのです。

この「せいけいいゆうびんきょく」は毎年恒例の行事で、他の学年の子どもたちや教員をつなぐ全校活動の様相を呈しています。校長室へ届いた二年生のはがきに「校長先生がんばって、おしごとをしてください。ぼくたちにできる事はおうえんだけです」という微笑ましい激励のメッセージがありました。この活動は武蔵野郵便局の見学へとつなげ、多くの人々の協力で成り立つ社会の仕組みを二年生が初めて実感する学習となっています。

表彰された子どもたちの学習

●国際交流賞

国際教育センターのお世話で昨年から小学校国際交流賞が設けられました。

今年度の交流賞は四名、また努力賞には九名と一学級が選ばれ、二学期終業式後に国際教育センター所長から表彰されました。昨年より倍増した応募作品が、子どもたちの国際理解への関心を深めるきっかけとなることを期待しています。

●マナーキッズテニス大使

第三回文部科学大臣杯マナーキッズテニス全国大会で、二年連続で六年女子がマナーキッズテニス大使に選ばれました。

この他にも、六年女子チームにマナー賞、五年男子に運動能力賞、六年男子に感想文賞など数々の賞をいただきました。

●発明くふう展

前号で第五十一回東京都児童生徒発明くふう展で学校賞を受賞したこと、また十三作品が特別賞・優秀賞・入選に選ばれたことをお知らせしました。この中で、第六十六回全日本学生児童発明くふう展に推薦出展された五作品が入選しました。特別賞（NHK会長賞）に六年女子、奨励賞に五年男子、入選が五年女子三名でした。

第九十二回卒業式

第九十二回小学校卒業式は、三月十八日に学園大講堂で行われました。

小学校最後の年を仮設校舎で過ごした六年生にとって、新校舎完成目前の卒業は心残りだったかもしれません。なお、第九十二回の小学校卒業証書通し番号は、九七五一番から九八七六番です。

成蹊小学校の創立から九十余年、卒業生一万人の大台がすぐそこに見えてくる時代となりました。

2008年度 事業計画・予算の概要

２００８年度予算は、理事会、評議員会の議を経て、第1表および第2表のとおり決定いたしました。

少子化による学校間競争は益々激しくなり、私立学校の経営環境は一層厳しさを増しています。そのような中、学園では、２０１２年の創立１００周年に向けて記念事業を進めています。２００８年度には、高等学校および小学校の校舎建築が相次いで完成し、学園本館の耐震補強改修工事も実施されることから、多額の建築費用などの支払いが発生いたします。このため、当年度の消費収支予算では、多額の支出超過額を見込んでいます。

第１表の消費収支予算書は、消費収入と消費支出の均衡の状態とその内容を明らかにすることにより、学園の経営状況を把握するものです。

消費収入の部では、納付金が前年度より２億８４百万円減少する見込みですが、これは新入生の納付金について、前年度は実入学者数により補正予算を編成したことによるためです。その他、手数料、寄付金、補助金などの実質的収入である帰属収入の合計は１４６億18百万円となり、昨年度より3億６百万円減少しています。

基本金組入額は学校運営のために基本的に必要とする建物、機器備品、図書などの取得額（第１号）、成蹊学園創立 100 周年記念事業募金から積上げる三菱留学生奨学基金や中村春二記念育英奨学基金(第３号)で、その合計額は 29 億 31 百万円となります。帰属収入からこの基本金組入額を控除した額が消費に充てられる消費収入で、その額は 116 億 87 百万円となります。一方、消費支出の部では、人件費、教育研究・管理経費などの消費支出合計は１４０億３５百万円となります。

この結果、消費収入合計と消費支出合計の差額23億48百万円が消費支出超過額となる見込みです。

第２表の資金収支予算書は、教育研究など学園全体の諸活動に伴う資金の動きが全て網羅されており、予算総額は２９９億17百万円です。収入の部のその他の収入は、退職金の支払資金および施設の建設や改修の支払資金などに充当するため、過年度に積上げていた資金の取崩し額です。一方、支出の部の資産運用支出は、三菱留学生奨学基金や中村春二記念育英奨学基金などの第３号基本金引当資産や施設拡充引当特定資産など、計画に基づく資金の積上げです。

２００８年度における学園創立 100 周年記念事業など主な事業計画は次のとおりです。

●中学・高等学校施設の再開発

2007 年 12 月に着工された高等学校ＨＲ棟の建築は順調に工事が進み、2008 年 12 月には竣工、３学期から使用される予定です。なお、高等学校ＨＲ棟は竣工後中高中央館と接続されますので、中高中央館の改修工事も実施します。

●小学校施設の再開発

小学校施設の再開発は、2007 年７月から着工しており、2008 年７月の竣工をめざして順調に工事が進んでおり、夏休み明けの２学期から使用される予定です。また、学園施設の再開発に伴い、従来の集中スチーム暖房設備が老朽化により廃止となる関係上、松林館の冷暖房設備を更新します。

●国際教育センター

国際教育センターでは、英語教育の可能性を探る試みである「多読教育プログラム」を引き続き進めます。また、大学の長期・中期・短期の留学プログラムのほかに、中学・高等学校でもケンブリッジ大学ペンブルックカレッジやオーストラリアのカウラ高校への短期留学プログラムを実施します。さらに、新たに設けた三菱留学生奨学金制度により、優れた成果を期待できる留学生に対する奨学金支給の充実を図ります。

●学園環境の整備

沿道緑化

野球場からアーチェリー場、ハンドボールコートと続く学園敷地の北側エリアの沿道緑化を進めます。武蔵野市の都市計画に応じて、コンクリート塀をすべて樹木でおおいます。

箱根寮の整備

夏の学校などの学校行事やゼミ合宿あるいは卒業生などにもよく利用されている箱根寮敷地内の周遊歩道を整備し、シャクナゲの群生地を広げます。

●学園本館の改修

1924（大正 13）年に竣工した学園本館は、現在は主に事務棟として使用されています。卒業生の愛着も強く、学園の象徴でもある本館も建築後 80 年を経過し、老朽化が進んでおり、次の世代に引き継ぐための改修を必要としていることから、主に耐震補強工事を中心とする大規模改修を実施します。

●学生指導・支援体制の整備

昨年度に引き続き、多様な授業に対応するため、大学５号館・９号館教室、ならびに中高中央館視聴覚教室の視聴覚設備の改修、バリアフリー推進のための大学８号館への自動ドアの設置、また、大学テニスコートの改修などを行います。

●環境保全活動の推進

2006 年度に設置された学園環境委員会により進められてきた、環境配慮の啓発活動の成果を引きつぎ、2008 年度には、10 月に ISO14001 の認証を取得することをめざして、環境マネジメントシステムに基づく環境保全活動を推進します。

第1表【消費収支予算書】（要約）

2008（平成20）年4月1日から2009（平成21）年3月31日まで　（単位：百万円）

消費収入の部

科目	予算額	前年度予算額	増減
学生生徒等納付金	10,949	11,233	△ 284
手数料	654	589	65
寄付金	424	456	△ 32
補助金	1,570	1,634	△ 64
（国庫補助金）	(888)	(957)	(△ 69)
（地方公共団体補助金）	(678)	(673)	(5)
（その他補助金）	(4)	(4)	(0)
資産運用収入	396	406	△ 10
事業収入	215	241	△ 26
雑収入	410	365	45
帰属収入合計	14,618	14,924	△ 306
基本金組入額合計	△ 2,931	△ 2,772	△ 159
消費収入の部合計	11,687	12,152	△ 465

消費支出の部

科目	予算額	前年度予算額	増減
人件費	8,169	8,031	138
教育研究経費	4,664	4,605	59
管理経費	912	955	△ 43
借入金等利息	40	48	△ 8
資産処分差額	11	478	△ 467
徴収不能引当金繰入額	9	11	△ 2
〔予備費〕	230	230	0
消費支出の部合計	14,035	14,358	△ 323
当年度消費収支差額	△ 2,348	△ 2,206	
前年度繰越消費収支差額	△ 3,946	△ 1,740	
次年度繰越消費収支差額	△ 6,294	△ 3,946	

第2表【資金収支予算書】（要約）

2008（平成20）年4月1日から2009（平成21）年3月31日まで　（単位：百万円）

収入の部

科目	予算額	前年度予算額	増減
学生生徒等納付金収入	10,949	11,233	△ 284
手数料収入	654	589	65
寄付金収入	424	456	△ 32
補助金収入	1,570	1,634	△ 64
（国庫補助金収入）	(888)	(957)	(△ 69)
（地方公共団体補助金収入）	(678)	(673)	(5)
（その他補助金収入）	(4)	(4)	(0)
資産運用収入	396	406	△ 10
資産売却収入	699	2,013	△ 1,314
事業収入	215	241	△ 26
雑収入	410	365	45
前受金収入	2,038	2,032	6
その他の収入	6,570	6,058	512
資金収入調整勘定	△ 2,462	△ 2,893	431
前年度繰越支払資金	8,454	9,795	△ 1,341
収入の部合計	29,917	31,929	△ 2,012

支出の部

科目	予算額	前年度予算額	増減
人件費支出	8,522	8,386	136
教育研究経費支出	2,807	2,683	124
管理経費支出	764	779	△ 15
借入金等利息支出	40	48	△ 8
借入金等返済支出	172	172	0
施設関係支出	4,042	3,494	548
設備関係支出	623	359	264
資産運用支出	4,569	6,579	△ 2,010
その他の支出	679	1,185	△ 506
〔予備費〕	350	350	0
資金支出調整勘定	△ 504	△ 560	56
次年度繰越支払資金	7,853	8,454	△ 601
支出の部合計	29,917	31,929	△ 2,012

二〇〇八年度 入学試験結果

●大学

2008年3月3日現在

学部学科		入学定員	一般入試 方式	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率	AOマルデス入試 募集人員	志願者	受験者	合格者
経済学部	経済経営学科	435	E方式	30	1,581	1,551	245	6.3	25	180	176	28
			A方式※	190	3,159	2,847	476	6.0				
			C方式	30	1,745	1,744	234	7.5				
			S方式	5	73	73	18	4.1				
	計	435		255	6,558	6,215	973	6.4	25	180	176	28
法学部	法律学科	250	E方式	20	872	847	130	6.5	6	88	83	13
			A方式	100	1,329	1,179	228	5.2				
			C方式	36	1,372	1,368	316	4.3				
			S方式	4	64	64	12	5.3				
	政治学科	140	E方式	10	499	480	64	7.5	4	44	41	8
			A方式	50	923	809	218	3.7				
			C方式	24	719	719	194	3.7				
			S方式	2	12	12	4	3.0				
	計	390		246	5,790	5,478	1,166	4.7	10	132	124	21
文学部	英米文学科	120	E方式	6	461	455	55	8.3	6	44	43	6
			A方式	60	676	597	198	3.0				
			C方式	8	525	523	107	4.9				
			S方式	2	22	22	5	4.4				
	日本文学科	83	E方式	6	354	349	41	8.5	2	20	20	3
			A方式	43	662	575	101	5.7				
			C方式	8	450	449	87	5.2				
			S方式	2	20	20	4	5.0				
	国際文化学科	100	E方式	6	543	529	55	9.6	5	66	64	8
			A方式	52	868	783	184	4.3				
			C方式	7	505	504	92	5.5				
			S方式	2	26	26	6	4.3				
	現代社会学科	100	E方式	6	520	508	54	9.4	6	37	37	7
			A方式	48	855	755	128	5.9				
			C方式	8	445	445	83	5.4				
			S方式	2	17	17	3	5.7				
	計	403		266	6,949	6,557	1,203	5.5	19	167	164	24
理工学部	物質生命理工学科	120	E方式	10	136	129	37	3.5	10	26	25	14
			A方式	40	464	363	128	2.8				
			C方式	22	772	772	232	3.3				
			S方式	3	38	38	12	3.2				
	情報科学科	120	E方式	10	226	219	47	4.7	10	36	36	15
			A方式	40	432	351	108	3.3				
			C方式	25	869	867	193	4.5				
			S方式	3	47	47	12	3.9				
	エレクトロメカニクス学科	120	E方式	10	172	169	43	3.9	10	18	17	11
			A方式	40	416	354	124	2.9				
			C方式	25	711	709	168	4.2				
			S方式	3	39	39	11	3.5				
	計	360		231	4,322	4,057	1,115	3.6	30	80	78	40
大学計		1,588	-	998	23,619	22,307	4,457	5.0	84	559	542	113

※経済学部A方式は「地歴公民型」と「数学型」の合計です。

●大学院

	専攻名	博士前期課程 募集人員	志願者	受験者	合格者	博士後期課程 募集人員	志願者	受験者	合格者
経済経営研究科	経済学専攻	6	4	4	4	3	0	0	0
	経営学専攻	10	17	13	7	3	1	1	1
	計	16	21	17	11	6	1	1	1
法学政治学研究科	法律学専攻	8	2	2	0	4	0	0	0
	政治学専攻	4	6	4	1	2	1	1	0
	計	12	8	6	1	6	1	1	0
文学研究科	英米文学専攻	8	0	0	0	4	0	0	0
	日本文学専攻	8	3	3	2	4	2	1	0
	社会文化論専攻	8	5	5	2	4	2	2	1
	計	24	8	8	4	12	4	3	1
工学研究科	電気電子工学専攻	12	16	16	14	4	0	0	0
	応用化学専攻	16	17	17	17	4	2	2	2
	機械工学専攻	16	15	15	14	4	1	1	1
	情報処理専攻	12	14	14	12	4	2	2	2
	物理情報工学専攻	8	14	13	10	2	0	0	0
	計	64	76	75	67	18	5	5	5
法務研究科		50	657	624	87				
合　計		166	770	730	170	42	11	10	7

●中学校

学年		募集人員	志願者	合格者
第1学年	第１回 男子	55	387	116
	第１回 女子	40		
	第２回 男子	20	549	52
	第２回 女子	15		
国際学級（４月期入学）	第1学年	約 10	54	23
	第3学年	若干名	8	3
中２帰国生編入試		若干名	11	5

●小学校

学年		募集人員	志願者	合格者
第1学年		112	908	112
国際学級	第4学年	16	26	12

●高等学校

学年	募集人員	志願者	合格者
第1学年	男女約 80	288	172
帰国生	第１学年男女約 15	38	16
第2学年編入試	若干名	0	0